
なんでやねん！

B G L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん！

【Nコード】

N9105X

【作者名】

BGL

【あらすじ】

平穏な日常を愛する高校二年生の天堂陸。

だが穏やかな陸の日常は、陸への恋心を燃やす幼馴染みの少女綾崎紫苑と五年ぶりに再会したことで、愛と情欲と陰謀が渦巻く日常に激変する。

財閥の令嬢である紫苑は、その可憐な容顔で綾崎グループのCMや雑誌で活躍中。その渋い若武者口調と男らしい性格で大ブレイク。

紫苑曰く乙女ザムライ。

紫苑は陸の恋人になるため、次々に愛 作戦（ラヴ オペレーション）を実行！

夜這い、甘言、無理矢理、監禁、虚言、色気、脅迫など。

そこへ、紫苑の婚約者にして世界有数の財閥の息子のアレックが参上。

三つ巴の恋戦が始まる！

この物語は、恋に狂った二人の富豪と、平穩を愛する庶民が激動の三角関係を繰り広げる疾風怒濤の恋愛ギャグである。

* 小説 & 投稿屋に投稿した作品を加筆修正しています。

プロローグ

てんどうりく
天堂 陸

夢を見ているのが不思議とわかった。
微妙に思い通りにならない体や意思。そして、ふわふわと捕らえどころのない曖昧な感覚からわかる。

今回の夢は忘れもしない……小学校六年生の頃のある別れの記憶。

それは晴れた昼下がりの午後だった。

近所で有名なほど大きい家……というより屋敷に住んでいる幼馴染みの少女が、両親の仕事の都合でアメリカに引越す事になった。

家の周りには少女の両親が呼んだ引越しの業者の人達が、忙しく荷物をトラックに運び入れている。

そして 視線の先には恐ろしく整った容貌をした少女がいた。

流れるように艶を帯びた天然の茶髪は背中まであり、一度視線が合えば吸い込まれそうな黒瞳が印象的だ。鼻筋のラインは綺麗な一言に尽きるし、形の良い唇は視線を逸らせなくらい可憐さに満ちている。

まだ幼さを残すものの、もう数年もすれば、きっと誰もが褒め称える美人になることは間違いないと思う。

その少女の名前を綾崎紫苑あやざきしおんという。

「もう会えなくなるのだな……」

けれども、その綺麗な唇から発せられた言葉遣いは、容貌の可憐さとは正反対にとっても渋い若武者のような凜々しい口調だった。

そして、紫苑は激情を叫びと共に、俺にぶつけてきた。

「ぐおおおおおおおおおつ、おのれえええええええええつ
！」

長い茶髪を振り乱し獣のような咆哮を上げ、鬼の形相を見せる紫苑に、業者の人たちが作業の手を止めて、何事かと目を見張っている。

夢に出てきそうなくらい鬼気迫る表情で、幼馴染はお気に入りウサギのぬいぐるみの首を引き千切らんばかりの勢いで振り回し、地団太を踏む。

止めないと……そう思うけど、恐怖で声をかけられないでいた。

触らぬ神になんとやら……それにしても夢に出てきそうな光景だ。いや今まさに夢に出てるのか……

この時、俺の瞳に焼き付いた凄惨な光景は、実際三日間夢に出てきて、うなされるはめになった。

計らずとも、紫苑との強烈な思い出トラウマとなった。

「お、落ち着けよ紫苑っ、頼むから……！ や、やめてあげて！

そんなにウサギを振り回すと首がもげちゃう!？」

俺の何度目かの必死な呼びかけに、ようやく紫苑はこちらを振り向く。

そして、もう一度おのれえええええええええと尾を引くような絶叫を上げて、紫苑は続ける。

「このまま幼馴染みの地位をガツチリとキープしながら、陸に言い寄るメスブタどもを排除し、中二くらいに無理矢理押し倒して、ラ

ブラブの恋人同士になるうという私の計画があああああつ！しかも、アメリカ！？ そんなの意思の疎通とかはかれないじゃないかあああつ！ しいていうなら作文書こうと思って本の題名書いて、自分の名前書いて、さあ、書くぞ、と思ったら何にも書かないうちに、物理的法則を無視して、一行目の二マス目にいきなり句点うたれて、終わりって感じじゃないかツツツ！」

紫苑の全音量をもってして告げた恐るべし愛の告白に嬉しいと感じつつも、どこか素直に喜べない自分がいることに気が付く。

「というか無理矢理押し倒して、なぜラヴラヴになるんだ!？」

「な、何言ってるのか俺よくわからないよ!？ それに、ちよっと声のトーンを落として冷静にだな……」

「なんで、陸はそんなに落着いていてすごさるか!？」

「尋ね返す紫苑の声は、雲を裂く稲妻よりも鋭い。切れ味抜群だ。」

「こんなんで髭剃りをしたら、きつと両頬は血塗れになるだろう。」

紫苑の心は不可解の三文字に縛られているのか、先程よりも酷く暴れます。

ウサギのぬいぐるみの耳に歯をたてながら、壁にウサギのぬいぐるみ押し付け、そのボディに連続で拳を打ち込み、捻り込み、鋭くえぐるようにダメージを与える様子は目を反らしたくなるほど「む、むごい」と戦慄と共に絶句するしかない。

ウサギのぬいぐるみに命があるなら、悲鳴を上げていることは間違いがなかった。

そして 突然、紫苑はウサギのぬいぐるみをいたぶる手を止めると能面のように無表情な顔つきでひっそりと呟く。

「縛り付けて、無理矢理車のトランクに入れて、アメリカに連れて行こうかな…… 空港に着いたら、そうだな…… あのポストンバックの大きさなら入ることができるだろう」

誰をとば聞かない。わかりきっているからだ！

「お、おおお、おおお落着けよ紫苑ツツ！ 一生会えない訳じゃな

いだろ？ な？ な！？ なぁッ！？」

小学生の俺は必死の形相で、危険な笑みを浮かべている紫苑の肩を揺さぶって説得する。

小学生にして、俺は生か死かの究極の状態に追い詰められていた。「むっ……そうか？」

疑わしそうな視線だッ。全然信じていない目だ！ 狂気が宿った瞳だ！！

「そうだよ、そう！ そうに決まってるじゃないか！」

悩む素振りを見せる紫苑に一気に畳み掛ける。じゃないと、俺は死ぬ。死んでしまう。

「そうだな……」

「そうだよ！」

紫苑が納得した顔で頷くのを確認して、俺は安堵の笑みを……

「アメリカはキスを挨拶代わりに頻繁に行うらしいし、恋愛のほうも進んでいると聞くからな……ラヴの勉強にはちょうど良いかもしれぬ、なっ！」

凍りつかせる！？

確かにこの紫苑という幼馴染、転んでもただでは起きない所がある。

全身の血液が凍るような錯覚を覚えてしまう。

「フフフ……！ 待っている陸ッ！ 私はアメリカで恋の武者修業をすることに決定多数で、大決定だッ！」

ビシリと右手の親指を、俺の鼻先に突きつけて紫苑はのたまう。

その瞳には、燃え盛る恋の野望が見えた。それはもう天下布武を唱えた織田信長はこんな眼をしていたのかと思うくらい。

「そう、再び陸に相見るその時は、私は天下無敵の乙女ザムライとなつて、陸を何て言うか、いただきますだ！ 押し倒すだ！ 無理矢理だ！ 陥落で愛の奴隷だ！」

「ご近所の人々に響き渡るくらい声高に宣言する紫苑に、俺は乾いた力の無い笑いをするしかなかったわけで……」

第一章 穏やかな日常よ、さよなら

堂家

天

堂陸

《天

「んっ……んーん………」
瞳を開けると、見慣れた自分の部屋が瞳の中へと、飛び込んでくる。

暫く呆けたように、視線の先にある部屋の白い壁を見ていた。

「ゆ、夢……か……?」

呟いて、ようやく思考が鮮明になってくる。

手に抱えていたクッションを布団に置き、ベッドから抜け出した。俺には妙な癖がある。

それは、寝ていると無意識に近くにあるものを抱きしめてしまうというものだ。

「ん~~~~~……っ」

二、三度大きく伸びをすると、ついさっきまで見ていた映像を脳裏に思い浮かべようと、頭を働かせる。

大きく息を吐いた。頻繁と言っただけではないけど、数週間に二、三度くらいの頻度でよく見る夢。

詳しい内容まで覚えていないけど、懐かしい中にも衝撃的要素が

かなり伴う幼い頃の記憶……。

少し気だるげに前髪をかき上げる。

「……暑いな」

時計を見る。そこに表示されてる時刻と温度を見た。

クーラーの冷気が消えた室内の温度は、28 を表示している。

窓を閉め切っていることと暑さを増してきた日差しのせいで、室内は蒸し風呂になりつつある。

窓辺に立ち寄り、勢いよくカーテンを開いて窓を開け放つ。

季節は夏。

網戸越しの外の世界は、朝からギラギラと暴力的に太陽が輝いている。

窓越しに聞こえる蝉の大合唱が、夏独特の雰囲気を運んでくる。

夏の太陽を直視してしまい、思わず目を細める。今日も暑くなりそうだ。

学校は夏休みに入り、部活もバイトもしていない俺はのんびりとした夏を過ごせそうだった。

自然と唇が笑みの形を作るのを感じる。

透き通った青い空。鮮やかな白い雲。蝉の鳴き声。唐突に初夏の涼風が駆け抜け、窓に吊るした風鈴が軽やかな音色を響かせた。

何といっても身体中に降り注ぐ、太陽の暑い日差し。

これらを素直にいいなと感じられる穏やかな日常。

それを俺は大事にしていた。

「……午後から図書館に夏休みの宿題でもやりに行くかな」

自分の部屋にある出窓の棧に腰掛けて、青空を見上げる。

夏の雰囲気を一時楽しむと、洗顔を済ませてリビングへと向う。

その途中で共通廊下の壁に掛けてある伝言板を見る。

「母さんは買い物で、海は、本屋……か」

海とは俺の双子の弟のことだ。現在同じ高校に通っている。

クラスは別だけど、隣のクラスなので体育とか一緒だし、休憩時間も一緒にいることが多い。

リビングにある壁時計は自室で見た時刻から十分ほど時を進めており、午前十時半に差し掛かっていた。

食卓に置かれていた食パンに、いちごジャムをつけて食べると、何気なしに食卓の上にあったテレビのリモコンを手に取り、テレビの電源のスイッチを押す。

アナログ放送が終わり、地デジの開始と共にブラウン管のテレビから液晶TVへと買い換えた。

分厚さがなくなり、薄型のテレビは綺麗ではあるが、なんとなく頼りない気がするのは俺だけだろうか。時代の流れと共に何もかもが変わっていく。

変な物悲しさに囚われていた俺だったが、浮かび上がった映像を見て口を止めた。

テレビにはさっき夢の中で出てきた少女　紫苑がCMに出ていた。

正確には夢の頃の小学生の外見とは違い、俺と同じく十六歳の姿でだ。

昔と違い、少しシャギーの入った大人っぽい印象のショートカットのヘアスタイル。

小さい頃よりもずっと綺麗に女性らしくなった美しい容貌は、多くの者を魅了して止まない。

だが、まあ……

『恋する女子にお勧め！　愛しきあの者の心を手にせよ！　いつもおぬしの唇を私に独り占めさせてくれぬか！？』

桃色の口紅の宣伝をする紫苑の性格は、どうも昔と変わっていないみたいだ。

ところが、この紫苑の普通の女の子と違う独特の性格……つまり

見た目は清純派美少女なのに、性格は竹を割ったようなさっぱりとした気質に若武者口調というアンバランスな魅力が、大衆に人気がでている。

今では綾崎紫苑と言えば、芸能人並みの知名度の高さを獲得していた。

CMに出ているわけは、紫苑の祖父 綾崎秀士氏にある。

彼は巨大複合企業経営者の社長で、様々な経営に着手している。

そのため彼の事業のイメージアップの一環として、孫娘である紫苑がCMや雑誌などに出ているという訳だ。

日本人とは違う垢ぬけたファッションセンスが女子高生に受けていて、女性用のファッション雑誌やクラスの女子の間で紫苑の名をたびたび耳にすることがあった。

少し寂しげな笑みを口の端に刻む。

昔は幼馴染みと言う関係だったけど、今は元幼馴染み。仲の良かったとは言え、おそらく小学校の幼馴染みなんて紫苑はとうの昔に忘れてしまっているだろう……。

それこそブラウン管のテレビが徐々に各家庭から消えていくように、彼女の思い出の中の俺も消えてしまっているに違いない……
事実、引越してから紫苑から手紙や電話の類いはなかった。

怒りはない。

あるのは何か胸の奥が寂しいような悲しさだ。

テレビの電源を消すと、食欲を失っているものの、食べかけの食パンをほうっておく訳にもいかないので、強引に残りの食パンを口の中に入れる。

いつもの甘さをどこかに置き忘れてしまったような……空虚な味がした。

食べ終わると、図書館に行く準備をする。

藍色のジーンズを穿くと、肩から袖の部分がミリタリーの柄がプリントされた黒のTシャツに着替える。

それから洗面所に向くと、寝癖のついた髪を水で軽く整える。当

然の如く正面の鏡に映る己の顔。

父さんに似れば男らしい容姿になったのに……そう思う中性的な顔立ちをしている。

しかも、声変わりがすんでもあまり低い声にならない。

パツと見て一瞬、男か女か判断がつかないと友達は言う。

言動や服装、雰囲気からで男と判るらしいが……それはつまり、少し女の子っぽい服装をすれば、ボーイッシュな女の子と思われるということだ。

だから女々しいと言わないまでも、男らしくない自分の容姿があまり好きではない。逆に父さんのように男っぽい容姿に憧れてしまふ。

ため息を一つつく。容姿のことなんて考えたって仕方がないことだ。

「行くか……」

それから勉強道具をバッグに入れて、外に出ようと玄関まで来た瞬間のことだった。

プルルルルル……。

「あ、電話か……」

慌てて履いていた靴を脱ぐと、共通廊下に置いてある電話を取るために、来た廊下を戻る。

プルルルルル……。

急いで電話機に向かうと、受話器をとった。

「はい、天堂ですが」

「……………」

返事をする、相手は沈黙を保ってくる。

絶え間なく、何かのアナウンスとかが聞こえてくる。駅だろうか？

『……陸か？』

受話器から俺と同年齢くらいの少女の声俺の名前を呼ぶ。綺麗な声だ。けど内心の芯の強さが滲み出た凜々しい口調。

ドクッ！

(この声……！？)

心臓の鼓動が大きくはね上がるのを感じた。

電話の相手は、さっきテレビのCMで聞いた少女の声に……似ている気がした。

「……………ッッ」

にわかに信じられない現実を眼前に突きつけられ、声なく固まってしまう。

『陸じゃ……ないの、か……？』

「あ、はい、そうですが……」

不安な思いを感じさせる声に反応して、戸惑いっつも慌てて返事をする。

けど俺の戸惑いは、少女の怒声にかき消された。

『遅い、遅い、遅い、遅いぞ、陸！』

「す、すまん……？」

謎の少女の剣幕に反射的に謝罪してしまう。い、一体何なんだ？
『全く、どうしてすぐに返事してくれないんだ！？ 凄く怖かった
ではないか！ だが、まあなかなか男の色気に溢れる声になった
な陸！ 私の乙女回路はピュアにドキ ドキと言う感じで……………
?? のわあああああああああッ!??』

少女は語気荒く続けたかと思うと、突然、鼓膜を破らんばかりの
驚愕の叫びを上げた。

「ど、どうしたんだ？」

キーンという耳鳴りの音を抑えて尋ねてみる。

『いかん、テレフォンカードの度数がみるみる減ってるでござる！
？ うなぎ下りだ！』

「う、うなぎ??」

『と、とにかく国際空港にある噴水の側で待っているから、早く迎えに来てくれ。以上、通信終わり』

ツー、ツー、ツー……。

電話の音が、虚しく俺の鼓膜を打つ。

虚しく？

いや違う。これから何か起きるような、そんな合図のような運命の鐘にも似た音で鼓膜を叩く。

まるで夏の夕立のような集中豪雨の如く言葉の前に、俺は一言も言い返すことができなかった。

それはあの小学生の時の、なつかしいやり取りを俺に呼び覚ました。

受話器を元に戻す。

電話をかけてきた少女の正体はだいたい見当がついている。

あの若武者口調。激しい性格。妄想癖の思考回路。意味不明のスラング。

「はは……嘘だろ……」

思わず口元を押さえる。

期待と困惑。喜びと不安。それらが嵐のように胸に去来する。

たった一つわかったことがある。

今をもって穏やかな日常が遠のくという変な確信がある……！

第二章 乙女ザムライ参上！

国際空港

噴水ロビー

あやさきしおん
綾崎紫苑

私の名前は綾崎紫苑だ。気軽に紫苑ちゃんと呼んでくれ。でも紫苑と呼び捨てにできるのは陸と私の血縁者だけだ。そのあたり、気をつけてくれ。

私は恋愛の初期段階である中学校時代を無念にもアメリカで過ごした。

だが、私は転んでもただでは起きない。

私は私を転ばした相手を一緒に引きずり倒してすぐさまマウントポジションを取るくらいのことにはする性格だと自負している。

ばっちりとアメリカでできた友とラヴの勉強をこれでもかー、つてなくらいで、ごっつあんですと言っ具合に修業してきた！

「フフフ……抜かりはないぞ」

サングラスを右の人差し指で押し上げて、自信気に笑う。

ちなみにサングラスをしているのは、ずばり格好つけているからだ。私は形から入るタイプだから、何だか企んでる感じがしてイイ感じだと思っからだ。

むしろ、抜かりがあつたのは私の家庭の事情だ。

恋愛の本場である高校時代に意気揚々と帰国する予定だったが、敬愛するお爺様との間に問題が生じてしまった。

「納得できるものか……」

胸中から湧き上がってきた苛立ちを、唇を噛み締めることで抑えつける。

バックの中に収納されたウサぴょんこと、ウサギのぬいぐるみに拳を叩きこみたい気分でござる。

(気分を落ち着けるには……)

陸の成長をリアルタイムで記録してある写真集(小型携帯バージヨン)を、胸の内ポケットから取り出す。

バリエーションは制服、私服、寝巻き、体操服など豊富な上に、陸の様々な嗜好から、交友関係まで網羅した完璧な陸攻略本!

陸の写真集を早速開き、光速で悶絶する!

せ、世界はバラ色に包まれているッ!

「なんと凛々しいのだ、陸は!」

思わず感激と興奮が口から衝いて出てくる。

さらりと女性のように艶やかな黒髪。切れ長の二重瞼。凛々しく整った鼻梁に、男の色気に誘われてつい重ねてみたくなる唇。引き締まった顎のライン!

どちらかといえば、中性的な感じが漂う美人　それが天堂

陸だ!

もう、何ていうか悶絶プリティイ百年殺しだ!

「む、胸キュンだ!　最高でござる!」

思わず流れた《よだれ》という名のラヴのほとばしりを、右手の甲の部分で拭う。乙女たるものいつでも身だしなみは大切だ。

だが、陸の二枚目な容貌だけに私は惚れたわけではないぞ。

惚れた大きな理由は、陸の真面目で優しい性格だ。ひたむきで真摯な態度も私の心に好感触だ。

電車でご老人に席を譲ったり、困った人をほおって置けなかったり、陸は様々な善行をしている。

クラスでは友人も多いし、学校の成績も校内十位に入るほどの優秀さだ。クラス委員も務めているんだぞ!

ちなみに、身長172?。体重60kg。血液型・O型だ。

なにせ綾崎グループの技術の粋を集結して造られたものだから、その内容の満足度は万歳無敵天下統一だ！

そう、ラブのためならここまでやる。その根性こそがアメリカで磨いてきたもの。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラブ魂》！

愛しい者を想う時間こそが、乙女のラブを育てるのだ。

そして、私は陸を想い続けてきた。この想い、そんじょそこの乙女には負けぬと断言できる！

握力60超えの右手をぐつと握り締める！

（そう、私は満身の力をこめて今まさに殴りつけんとする握り拳だ！）

この暑い夏に負けぬ熱さで、私は陸を口説く！ 陥落させる！

完全服従だ！ 調教レベルマックスのCG率100%だ！

もう何て言うかメロメロだッ！ 容赦無用の必殺必中の無理矢理だ！

必ず私を好きだと言わせてみせる！

でないと……私は……綾崎家の運命　―お爺様との約束を守らなくてはいけなくなる。

（何としても陸に……ッ！）

瞳をラブ色に燃焼させる。私の小宇宙は今、無限の高まりを見せている。小宇宙が燃え上がる時、不可能は可能になるのだ。

かの英雄も言ったではないか。

「世の恋愛に不可能と制限はない、と！」

カッと瞳を見開き、私は未来を視る！ 薔薇色と虹色に輝く絶対無敵の未来を！

私を抱きしめて口付けをして熱烈な言葉で私を口説く陸を妄想をしながら、私はラブ必勝の決意を心に刻み込めた。

「マジやばいな……」

期待が現実になり打ちのめされた時、人はこんな絶望を吐きだすのだろう。

少年の幻想が打ち壊された時、少年は大人へとなるのだろうか。

ならば、俺は大人になどなりたくなかった。

後悔に瞳を閉じ、少し前の自分を止めたくなる。

ようやく空港に着いた俺は噴水がある場所を空港の係員に尋ねた。それから噴水のある空港ロビーへと向かい、目的の少女を探して周りを見渡す。

まず、視界に入ったのは、見事な意匠をこらした噴水だった。見ていると、なんとなく涼しげな感覚に捕らえられる。

「……と……やばっ、早く探さないと……」

我に返ると、周辺を見渡す。

あたりには人を待っている人たちがたくさんいた。ビジネスマン、女子大生、子連れの母親、カップルなどなど。

これだけの人の中から電話の相手を探すとなると、少し面倒なことになりそうだった。

「これじゃあ、見つからないかもしれない……」
ため息をつく。

ここで電話の相手を見つけないのは不可能に近い。空港のアナウンスなどを使ったほうがいいかもしれない。

と
アナウンスの音が右の方から聞こえて、何気無く右の方を見た。

世界が切り取られたように停止したかのように錯覚した。

鼓動が高鳴る。血潮が震えた
そこには……そこには俺と
同年代くらいの少女がいた。

サングラスで目元が隠れているが、整った鼻筋や形の良い唇からかなりの美少女と推測できる。

少しシャギーのはいつたショートカットの髪。

テレビや雑誌などでも、滅多に見ることができない美しい少女がそこにいた。

薄いピンクのミニのシャツの裾は短く、そのせいで白いお腹が見えているのが眩しい。

豊かにシャツを盛り上げる胸の辺りにはLOVE&CRAZYのロゴ。大胆に白い太股を露出させて膝上でワイルドにカットされたジーンズ。

カジジュアルなスタイルでボーイッシュな雰囲気なんだけど、それとは逆にスタイルはかなり……そのなんだ……思わず目がいつてしまふ胸の膨らみといい、くびれた腰といい均整のとれた女性らしい体つきをしている。

思わずその少女に見惚れてしまっだろう。

そう、だろう、だ。

少女が普通に佇んでいるなら、俺は見惚れていたかもしれない。

本当に鼓動が高鳴る。血潮が震えた

ドン引きで。

「マジやばいな……」

少女はその可憐の容姿にまるで似合わないオーラを周辺に醸し出していた。

短的に言おう。

少女は、身悶えしていた。

少女は完全に妄想世界に　　あたかも初めて覚醒剤を使用した麻薬患者のようにのめり込んでいた！

口の端に少し涎をたらして虚空を見上げながら薄ら笑いをしているかと思えば、突然、恍惚とした表情で自分の体をかき抱くようにして身悶える。

少女の体からはドスピングのオーラが陽炎のように噴出していた。そのせいで、少女の容姿の良さに惹かれた男性たちも、その異様なオーラに「うおおおっ!？」みたいな感じで躊躇して、ナンパと云う行為に移せないようだった。

(今なら逃げれるッ)

俺の中の危険回避を司る神経が全力で警鐘を鳴らしていた。

それなのに。

そんな気持ちとは裏腹に、不思議と体は少女の方に動いていた。

まるで闇の中に浮かぶ光源を求めるように。

まるで懐かしさに引き寄せられるように。

まるで　この時をずっと待ち望んでいたかのように。

破滅するとわかっていても踏み出してしまう……この感情はなんて説明していいのかわからない。

戦いの前に恋人や家族のこと話す一兵士の気分だ。それ死亡フラグとわかっているのに口にしてしまう。

(だって口にしないと、セリフなしの一兵士として終わってしまうじゃないか！)

そんなわけのわからないことを考えてしまう。

あるいは蛇に唆されて禁断の果実を口にしたアダムとイブはこんな気持ちだったのだろうか？

と、不躰な俺の視線と接近に気が付いたのか、少女が不意に俺の方を物凄い勢いで振り向く。

それはさながら獲物を見つけた肉食獣の如く。

「!?!」

失敗の二文字が頭を通り過ぎ、続けて手遅れの文字が赤点滅する。予想が確信に変わった際の衝撃を受け、少女を凝視する。

その少女は俺がよく知っていた幼馴染みに、やはりよく似ていたから……

しかも、俺の目と耳の錯覚かもしれないが、一瞬……少女の口元が、「りく」と俺の名を呟いた気がした。

俺の顔を見ると、少女は喜色と安堵を顔に浮かべる。

その笑顔に既視感を感じた。景色とかで体験したことがあったが、人を感じるのは初めてだった。

「紫、苑……?」

少女を見て呟く。

その声は空港の喧騒の中ではあまりにも小さく、情けないくらいに掠れていた。とても少女の元まで届いたとはとても思えない。

情けないことに彼女を目の前にして、探るべき行動を探しあぐねていた。

行動は少女が先だった。

「陸!」

俺を呼ぶ凜とした声。

いつもそうだった。

迷い惑って立ち止まっている俺と違い、彼女は迷わないしブレない。いつだって真っ直ぐ前を見て走り出すんだ。

一直線に走るその背中が眩しかった。だからいつもその背中を見失いように追いかけていた。

まるで翼が生えているみたいに軽やかに、その可愛い容姿と相まって彼女は天使のようだった。

「もう我慢できないッ！」

そう天使のよう《だった》んだ。

どこぞのモーニングのコーンフレークのゴリラの如く。

発情期のゴリラって危険じゃないの？ そんな疑問がぼんやりと浮かんだ瞬間だった。

「陸！ 陸陸陸ー！ーッ！ 好きだ、ラヴだ、抱き締めたい！」

さあしよう！ すぐにやろう！」

その疑問はすぐにわかると思った。嫌になるくらい。

（ああ、なのに……！）

危険ってわかっているのに！

俺という生き物は 自分の名前をあの頃と同じ温かさで呼ばれ、懐かしさと嬉しさで心臓が一際大きく刻むのを感じてしまった。

だから逃げ出せなかった。

少女は 紫苑は荷物の薄紫のボストンバックを空港の床に

置いたまま、俺だけを一直線に視界に捕らえ、駆け出して来て、そして その一瞬の郷愁と愛しさと懐かしさが致命的であった。

「ごっつ！？」

気が付いた時には紫苑に押し倒されていた。

呆然としていたせいで彼女の勢いを耐えることができずに

いや身構えていたとしても屈強なラグビー選手数人がかりでも止められたかどうか。猛牛ですら押し倒す勢いのタックルだ。プロラグビーの選手にスカウト間違いなしの強烈さは、胃の中の食パンが喉の奥まで出てきたのが物語っている。

ラグビー選手でもない俺が猛牛と化した紫苑を止められるわけもなく、紫苑を抱いたまま空港の床に背中から押し倒される。

「いてて……うッ!?」

現金なもので、痛みは未体験の感触に忘れてしまう。

隙間なく抱きつかれて、その時初めて俺は女の子の身体とは凄く華奢で柔らかいんだなと驚いた。

ひどく軽くて、乱暴に扱ったら壊れてしまうような脆さが手のひらを通じてぬくもりと共に伝わってくる。それと同時に凄く心地の良い感覚と強い存在感が、呆然とする俺の身体にダイレクトに伝わってきた。

「……し、紫苑なんだよな?」

恐る恐ると言う感じで、胸の辺りに頬をぐりぐりと頬ずりし続けている女の子に尋ねる。

「うむ! 帰って来た紫苑ちゃんだ。……久しいな陸」

顔を上げてサングラスを外すと、鮮烈な双眸と出会う。

ああ、そこには紫苑がいた!

小学生の時に別れ、美しく成長した幼馴染が……洗練され美しさを増した容貌。でも確かに子供の頃の面影を見つけて胸が熱くなる。生き生きと活力に満ちた黒瞳は、至近距離で見れば吸い込まれてしまうほどの輝きを放っている。

花の綻びを思わず可憐な微笑みを紫苑は俺に向け、

「乙女ザムライ参上だ!」

そう言っ て俺に笑いかけた。

第三章 動き始めた乙女の夏

《天堂陸》

胸の中の紫苑の存在が信じられなかった。

まるで真夏の大気が生み出した陽炎のように存在は鮮明なのに、掴むことのできない不確かさ……そんな感覚を目の前の少女に感じていた。

実を言つと紫苑に会って、喜びよりも戸惑いの方を多く覚えていた。

普通は喜ぶだろう。なにせ幼馴染みがアメリカから帰国したのだ。それも自分を 俺を覚えていてくれた。

そのことに対する嬉しさ。それは空港で紫苑を見た瞬間感じた胸一杯に広がる歓喜。

それが裏付けている。

けど、歓喜が過ぎた後に来たのは戸惑いだ。

戸惑いを覚えた理由は紫苑の《今》にある。

朝見たCMが頭を掠める。

そう 紫苑の祖父。

つまり祖父の綾崎秀士は世界的に有名な巨大複合企業経営者の社長だ。色々な事業に幅広く手をつけている相当な資産家 iya やそんな一資産家という小さい枠に彼をくくることはできない。

綾崎財閥の総帥である綾崎秀士。紫苑はその孫娘だ。

俺と紫苑は今こんなものにも近いのに、突如見えない巨大な壁が立ちただかった気がした。

『見上げるような世界』

確かに昔の紫苑の家は俺の家に比べてかなり大きな家だった。俺の家の数倍は軽くあったと思う。屋敷というような豪邸に公園かと思紛うばかりの広い庭があった。

けど、昔はそんなことはどうでもいいことだった。富豪と庶民の世界の違いなんて全く気にならなかった。

『今、目の前にある巨大な現実』

けれど、今はもう理解してしまった。

事業拡大のせいで生じたアメリカへの引越し。それによる紫苑との別れ。流れていく五年という年月。

紫苑と離れていた五年間の歳月が俺に理解させてしまっていた。

その歳月は分別のない少年を、世の中のことを諦念混じりの理解ができるような青年へと変えていた。

社会に生きていく上で縛られる『常識』と言う名の鎖。年を重ねるにつれて、隠す事を余儀なくされる感情。廃れていく情熱に、蓄積していく虚無。

『知らなかったことを気が付くのは、必ずしも良いと言えない事実』

そして、紫苑と自分との違い。
それはテレビのCMや新聞などで、克明に慈悲なく圧倒的な脱力感を持って俺に伝えてくる。

(『住む世界が違うんじゃないか?』)

叶わぬ夢ほど嫌なものはない。
憧れるだけ憧れ続け、届かず、掴めない夢。求めて膨らんだこの憧憬は一体どうすればいいんだ?

目の前にいる少女は、本当はこんなところにいるはずのない存在だ。

非日常の顕在。それが戸惑いの理由だった。
そんな事を考えながら、俺は五年振りに会う幼馴染みを見上げる。
長い髪は活動的な印象のショートカットになっていた。

(髪、切ったんだな……)

その一言を胸の中で飲み込む。
そんなことはCMを見ていればわかっていたことだ。
紫苑がその長い髪を切った時期だって本当は覚えている。
でも俺はこの時、何を言えばいいかわからなかった。

胸が高鳴る。感動に震えに震えるのは身体なのか心なのかかわからない。

この切ないような苦しいような、それでいて暖かいこの気持ちは
「陸、これは肯定の合図と受け取ってよいのか? つまり寝室のハ
ート型の枕でイエスの選択ということだな? ふっ、そうと決まれば
ムラムラがもう我慢できんでござる。ほらあそこのトイレでいい。

行くぞ！ さあ行くぞすぐ行くぞ今行くぞ！ 色々な意味でイクぞ
！」

あ、絶望ですね。（乾いた笑み）

五年振りに再会した幼馴染みは、いい感じに振り切れていた。もう常識とかそういうゲージが。

たぶん存在しないんじゃないかな、そういう単語が。

乙女として守らなければいけない絶対境界線の遥か向こうで魔王笑いでいた。

勘弁してくれよ、もう！

「い、一体何をやる気なんだよ！」

「何って、それは陸、ナニに決まっているだろう？」

声を荒らげる俺に、にやりと笑う様は下手に容貌が可憐な分、その威力が凄まじい。

（親父ネタかよ！？）

戦慄する。マジで戦慄する。

その可憐な容顔で、その返しはして欲しくなかった！ 思春期の

少年の憧憬がハイエナに骨まで貪られていくかのようだ！ 痛い、

痛いよ！ 数瞬前までのときめきを俺に返してくれッッ！

紫苑、お前がいましたことは、国民的アイドルの主要メンバーが鼻くそをほじったに等しい行為だとわかっていているのか！？

というか紫苑のтонでもな問いかけでようやく自分達がどういふ体勢にあったか、嫌なくらい気がつかされる！

白昼堂々空港の床の上に仰向けで、紫苑に押し倒されている。

慌てて視線を走らせて見ると、通行人の多くがこちらに好奇の視線を投げかけている。

「うわっ！？ ちょ、ちょっと！ 取りあえず立とう！ 離してくれ！」

紫苑を離し、急いで起き上がるうと……

「否ッ！ 断じて否ッッ！」

思わぬ返しにたじろぎつつも、突っ込みで応戦する俺だったが、
「気にするな。そんなことよりも……ふふふ、嫌よ嫌よも好きのうちでござる」

「一言で切って捨てられた上に、どこの悪代官だよ!？」
ハマリすぎる紫苑の口調と表情に思わず突っ込む。

「だが、まあ安心しろ、陸」
すると紫苑は慈母のような優しい微笑を見せる。そんな顔で笑えばメディアが清纯派美少女という単語を使うのも納得できるから

怖い。

「優しくするから大丈夫だ、フククツクツ、フヒヒツグフフフ
フフフフ！」

「ごめん、最後の笑い声で台無しだから！ 黒い本音だ漏れですから!」

「ぬっ」

慌てて口元を隠す紫苑。けど遅いから。致命的に遅いから。人身事故起こした後に無免許だったというくらいに致命的ですから。

「まあ、流石に冗談だ」

「あ、ああ。そうだよな……」

あっさり紫苑は俺を拘束から解放放ち、その態度に勝手だと自覚しているんだけど……失望を覚えてしまう。

（何を自惚れているんだ、俺は？ さっきの紫苑の言葉は冗談に決まってるじゃないか……）

知らずうちに紫苑の存在に浮かれていた俺は内心で恥じる。

（俺ってやつは……つくづく単純なんだな）

「私もこんな人の多いところでラヴに持ち込む気は毛頭ない。露出狂ではないからな」

だが、紫苑の発した次の言葉で俺は硬直する。

「ええッ!？」

驚愕の呻きを上げ、落としていた視線を紫苑に戻す。

「じゃ、じゃあ……人気のないところだったら……どうするんだ？」

恐る恐る探るような目つきで尋ねる俺に、紫苑は惹きこまれるような凄絶な艶笑を浮かべた。

「無論、知れたこと」

それはさながら契約を交わした人間の魂を手にした悪魔の如く。麻雀で言うならロンを宣言する寸前の人間の超ドヤ顔に近いかもしれない？

清純な顔つきがどう転べば、このような恐ろしい笑みになるんだろうか！？

美女と野獣の題名が違つとこの瞬間わかった。

美女と野獣じゃないんだ。何で気がつかなかつたんだ、俺は！

（美女は野獣だッ！）

知りたくなかつた真理を悟ってしまい、哲学的電流に身を震わせる。

だが、俺の震えなど紫苑は待つてはくれない。

形のいい唇が、毒電波を高速シャウトする。

「18禁の激甘ラブ ピーチ萌え的美少女ゲームのようなラブに持ち込むに決まつておろうが！

わかりやすく言えば、少年誌ではできないが、青年誌では容赦無用にできることだ！」

「か、勘弁してくれ！？ 最近のトレンドイはR15ですよ！？ つて言うか……冗談……だよな？ だよな？」

さすがのように俺は紫苑へと問いかける。

頼むよ。結構ギリギリなんですよ。これ少年誌ならトゥブルの如く色々見せすぎて少年誌追放デビューですよ！？

そんな俺に紫苑はきりりとした視線を向けて言い放つた。それはもう容赦無用に。

「武士に二言はない！ で、ござる」

その真剣の如く切れ味に満ちた鋭い視線！ マジだ！ 彼女は本気と書いてマジだ！

どこぞの魔球を投げる寸前のピッチャーのようにドス桃色の炎が双眸に燃えているよ。

（このままで俺は恋の三振打者だ。球場ではブーイング、控えてベンチを温め続け、契約打ち切られる寸前の公園的サラリーマンじゃないか！ とにかく話題を変えないと！）

本能がよこした明確な危険信号。

背筋を絶叫上げて駈け抜けた悪寒に一もなく二もなく飛びついた。「そうだ！ 紫苑お腹減ってないか！？ ほら飛行機に何時間も乗ってたんだろ？ お腹減ってるんじゃないか？」

目を覆いたくなるような不自然な話題のふりかたに引き攣った笑顔を出してしまう。

もうちよつと、まともなことは言えないだろうか、俺は？

もう相手の術中にハマって、何を切るかわからずに出してしまっただ牌が、

「そうだな。腹が減っては戦^{ラサ}ができぬ、と言っしな。ここはたらふく食って力を蓄えるか」

紫苑の上がり牌という……レートが巨額なら「ロンロンロンロオオオオオン！」と脳内分泌が大量に流れるが如くだ。いや、これハネ満跳んで四倍満で役満？ 裏ドラ乗っちゃってます？

お金払えないので採血ですか？

（ぼ、墓穴！？）

それは精神的なものだったけど、まるで身体中がバネのようにたわみねじ曲がって、深い奈落に落ちて行ったような気がした。

まさに自分で掘った落とし穴に落ちた気分だ。切ないも度を越すと、その……犯罪ですよ？

曲がり角の自動販売機でジュースを買って飲んで、戻ったら原付に駐禁で罰金とか、それ酷いよ！ 惨いよ！ 切ないよッ！

この時代、世紀末救世主を望んでいるよ！

誰か取り締まってください。この世の中の切なさを。罰金は仕方ないですけど、せめて良い行いをしたならポイント還元してくれよ！

七十歳から年金支給の引き上げとか……それマジ犯罪ですよ？

なんてどうでもいいことを考えてしまっくらいに、要は混乱していたわけで……俺、どうなるんだろう？

取りあえず……周囲の目が……もう本当に痛いんで……お願い助けてください。

第四章 ラヴゴっあんです 作戦

《天堂陸》

売られる子牛的感觉で気がつけば、空港にあるとあるレストランに入店させられていた。

あのままさらしものになるのは耐えられないところであったから、どこか店に入るのは悪い選択肢ではないように思えた。

だがそれは甘い認識だと思い知らされた。

レストランと言う限定された空間であるからこそ、紫苑の容貌は群を抜いて目立っていた。

ウェイトレスやウェイター。食事待ちの人や、中には食べかけの手を止めて、紫苑に見入っている人もいる。

視線を外せないぐらい美しい容貌。それはサングラスをかけていてもわかるのだろう。

ふとそこにいる利用客の思いが届いたのか、紫苑の顔からサングラスが外される。

誰かが息を飲む音が聞こえたような気がした。

巨大な美を目の前にした時に巻き起こる現象。静かな感動混じり

の吐息があちらこちらで上がる。

ただそこにいるだけで人を惹きつけてしまうカリスマが紫苑にはある。

今、レストランにいる人のほとんどが、紫苑に注目していた。

目立つことが嫌いな俺としては、あまり居心地が良くない。事情が許してくれるなら、今すぐにも背中にも羽を生やしてここから飛び出したい気分だ。

やがて、一人のウェイターが注文をとりやって来た。

「い、いらっしやいませ、ご注文はなんにいたしますか？」

見るからに緊張しているが、その視線は吸い込まれるように紫苑だけに注視されている。

「……俺はエビピラフを」

「へ？ あ、はい」

そこで初めてウェイターは俺の存在に気がついたようだ。

おおかた紫苑しか目に入ってなかったんだろう。

(まあ、別にいいけどね……)

独白しつつも、おまけのように扱われては怒るほどではないけど、正直へこむ。

「え、えっと。その、お連れの方は？」

紫苑に見惚れてしまうのをなんとか断ち切るように、ウェイターは対応を続けようとする。

けれど、その声は哀れなくらいに上ずっていた。

しかし、紫苑はそんなウェイターを筆頭に周囲の注目にまるで頓着しない。

「私はステーキセット。焼き加減はウエルダンで。料金割り増しでもいいから500gにオーダーカット頼めないか？ あとつけあわせにフルーツサラダ。無論、ライスは大盛りだ！」

レストラン中に響くかと思われる紫苑のハラペコ宣言に俺を始めとした周囲の利用客はテーブルに突っ伏す。

「し、紫苑!？」

悲鳴にも似た声を上げる。周囲のざわめきが嫌なくらい押し寄せてきたのを感じる。勘弁してくれ！

今の紫苑の発言は、皆の抱く幻想という名の固定概念を右手で打ち砕くこと120%だ。

というか、ヒロインが堂々と肉って。しかもとどめにご飯大盛りって……

「ふ、陸。私の前世はたぶんティラノサウルスだ。そして陸の前世は草食系の動物だ」

「……………」

それは何だ……俺がお前に食べられる運命だと間接的に伝えたいのか？

しかし、言い返せない俺は目をそっと伏せて紫苑のギラギラした双眸から目を反らす。

見ちゃダメだ。見たら勝負始まる以前に決まってしまう確信がある。

ウェイターが「な、なんとかします」と答えてその場を下がったのを見送ってから、気になっていた話題を振ることにする。

決して、紫苑の視線の圧力に負けたわけではない。

「あ、そう言えば紫苑発音が凄いな」

会話の時に英単語が出てきたとき、紫苑の英語の発音が日本人が口にするような和製英語ではなく、さすが帰国子女というのは伊達ではないと思うくらいに本場っぽいのだ。

「まあ、五年もいれば英語など自然と身につくものだ」

特に自慢するわけでもなく紫苑はさらりと凄いことを言う。

実際、紫苑にとって英語を話すことはそれこそ日常のことで自慢するようなことじゃないんだろう。

「そんなもんかな。中学、高校で英語を五年勉強しているけど、簡単な単語や文法なら何とか聞き取れるくらいで、とてもじゃないけどしゃべれないな」

事実、日本の学校の英語を受けていて英語がしゃべれるような生

徒などほとんどいない。

四年近く英語を習っていないながら、しゃべれないなんて……俺たちは本当に《英語》を習っているのだろうかと初めて疑問に思った。

「ふむ……」

俺の言葉を吟味するように聞いていた紫苑は、ポンと手を叩く。

「外国人の恋人が出来たと思って勉強すればみるみる上達するぞ……まあそんなことは私が許さないけど、なッ」

うまいことを思いついたという楽しげな口調で話していた紫苑は、最後の方で一転　　ギラリと瞳を光らせ、語尾の「なッ」ってところを強いアクセントで言った。

それは紛れもない警告……脅しだ。

素早く視線を明後日の方に反らし、お冷を口にする。

結構かなり本気で料理がくるのを待ち望む俺だった……。

暫くして、頼んだ料理　　あれはなんだ？

その肉は分厚かった。大きく、重く、ステーキというにはあまりにも大きすぎた。

それはまさに肉塊だった。

鉄板の上で湯気を立て、暴力そのもののように鎮座している様子はキングオブキング。

その肉を切るといふよりは削るように引きちぎると、一口で頬張る。

ムシャムシャならまだ可愛げがなくもない。

だが、年頃の乙女がガツガツという擬音で肉を食るのはどうだろう、と。

以前、テレビで見たマニヤンガ自然保護区の肉食獣が草食動物に襲いかかる情景がなぜか思い浮かぶ。

気にとれるくらいの剛毅な紫苑の食べっぷり。

これではどちらが男かわからない。少なくとも食べる擬音では、俺は女の子のようなものだ。

その可憐な口に似合わない豪快さとスピードでランチを食い漁る

様子は、少年が美少女に抱く幻想を木端微塵に打ち砕く率、実に120%だ。

幻想に抱かれて溺死する気分はこんな感じなのだろうか？

「ぬおッ!？」

唐突に紫苑は奇声を発して、食べる手を止める。

その表情は大切な何かによろやく気がついたような、後悔と自分への憤りに近い表情を刻んでいる。

「どうしたんだ？ 詰まったのか？」

一体どうしたんだらう？

尋常ではない紫苑の態度に俺は首を傾げる。

「重要なラヴテクニクを忘れていたでござる」

ラブ……テクニク？

ダメな予感がした。それはもう凄まじいまでに。

つうー、と。

一筋の冷や汗を頬に垂らした俺に、紫苑は続ける。

「あーん、と食べ物を楽しめる者に食させることによって好意度を上げ、恋人の座をゲットでござる！」

紫苑はすでに残り三分の一になったウェルダンのステーキの残り全てを、「ぬん！」と言フォークで突き刺すと、肉の欠片と言うより、肉の塊を俺の目の前に向けて堂々と言った。

「あーん」

その光景はひどくときめかなかった。

おそらく、俺の心臓の活動状態を心電図で見れば、まったく平静通りだっただらう。

いや、もしかすると上昇するどころか、下降していたかもしれない。

だって、肉汁滴るこの光景はとて……ときめかない。

まだ見ぬ未来に向けて脱出したいという渴望をひどく感じた夏の

昼であつた……。

第五章 乙女ザムライ ラヴ演技

《綾崎紫苑》

『あーんラヴごっあんです 作戦』も無事に終わり、意気揚々と私は伝票を持って、レジに移動する。

「し、紫苑、俺が払うよ！」

私の行動に陸は慌てて財布を右のポケットから出そうとするが、右手の手のひらを広げることで陸の行為を制止する。

「男に恥をかかせるな」

ニヤリと笑ってみせる。

「紫苑は女の子だろ!？」

「む……男女差別か？」

素早く切り返す。

「さ、差別ってわけじゃないけど……そのやっぱり、何て言うか……」

言いよどむ陸に、天使を彷彿とさせる笑みを意識的に浮かべる。

「気にしなくていいぞ? この紫苑ちゃんにランチを奢られたこと

を一生胸に刻みつけてくれれば、全然構わないぞ。むしろこちらの狙い通りだ。こうして陸に恩を売り、逃げ道を一一つ丁寧かつ偏執的に塞いで私の虜にする作戦の一部だからな。全然気にしないでくれ」

「!?!」

陸はなぜか顔面を蒼白にした。

突然、氷河期に閉じ込められた恐竜のように、激しく体を震わせる。

まるで重大な禁忌を知らずうちに犯してしまった罪人のような悲痛的な表情だ。どうしたというのだろうか？

「絶対、払う!」

「駄目だ、認めぬ!」

駆け寄る陸に、刃の鋭さで陸の主張を切り捨てる。

棒立ちになる陸。その隙を逃さずレジへと猛ダツシユする。素早く福沢諭吉殿を一枚、高速でカウンターに叩きつける。

「娘ッ、釣りはいらぬ!」

「あ、ありがとうございます!?!」

私の剣幕にレジの娘は震えつつ、料金を受け取る。

「で、ですが、お釣りを……」

「ならばその本当にその元に届くかどうかともわからない募金箱にでも入れるがいい!」

「ま、待ってくれ、俺の分は……!」

呆然とした状態から陸は慌てて財布を取り出しつつレジに近づくが、獲物を狙うムササビの如く手首のスナップを使って、陸の口を後ろから塞ぐ。

「ふむうツツツ!?!」

突然の拘束に驚愕の声を上げる陸。

陸の唇の感触は手のひらを通して、私の胸をせつなくムラムラと焦がす。

陸の吐息が私の手のひらをくすぐるのは答えようのない快感だ。

はあはあ、たまらんツ！

私は特にサドというわけではないのだが、こゝこゝこゝ、これ私の足の指をな、なな舐めさせたらどうなってしまうのでござろうか！

(むはあああああッッッ！)

まずいまずい！ 愛しい者に強制する背徳感と征服欲のせめぎ合いが、私の乙女中枢経路にスパークを生み出す。

(取り合えず、あとで手のひらに口づけよう。否、舐めまわそう) そう決意する。

それにしても、ああ、なんと素晴らしい唇なのだ。

いつかこの唇を私だけのものにしてやる。私のもので万歳だ。何と最高なんだ。神様の贈り物に違いないな、うん。

ラヴで緩みきった笑いを口に象りながら、陸を羽交い絞めして、空港のレストランを後にした。

「けどさ、紫苑。これからどうするんだ？」

場所は変わって空港から駅へと向かう改札口周辺。あたりは相変わらずの人込みの密集地帯だ。

「……とりあえず家に行くつもりだが？」

平常心を装って答えながらも、陸の言っている意味は分かっていた。

おそらく、今日どこで宿泊するか聞いているのだろう。

なにせ、以前私の住んでいた家は現在取り壊されて駐車場になっているらしい。

(さて……これからが一勝負というわけだな……)

計画は単純にして絶大。強大にして無比。最強にして完璧。

計画の内容はマル才風に言えば、ズバリ陸の家に転がり込み、こ

の夏の間、陸の心を射止める事にある！

(既成事実さえつくれば、お爺様も納得させる事ができるに違いない！)

つまり、そう言う事だ。

そのためには、駐車場になっっていることは知らなかったということにして、陸の家に厄介になりラブチャンスを掴まなければ……！
「何がって……その……紫苑の家、引越してから駐車場になってるんだぞ？ ……一体どうするんだ？」

「な、何いいいッ！？ 私は家なき子の少女になってしまったって事かッ！？」

証拠がでそろって、にっちもさっちもいかない犯人のような切羽詰まった声で、私は狼狽する。紫苑ちゃん迫真の演技だ！

それは周りの人々が何事かとこちらを注目していることから明白だ。

「そういう事になるけど……」

「ああッ、何てことだ！ 紫苑ちゃんアルマゲトン的大ピンチッ！ 赤信号で飛び出してしまった気分だ！ お子様にも分かりやすく言うならば、ウルトラマンの必殺技のスペシウム光線が怪獣にきかず『これでは地球の平和が……』ってな感じの地球規模級の大ピンチーーンチッ！」

ついでに頭を抱えて、その場で膝を付き、大地に上げられた金魚のように、のたうち回ってみる。第二次成長期の暴走というもので七転八倒、かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ！

「分かった！ とにかくこんなところで暴れるんじゃない！」

陸は周辺の視線が気になるのか、落ち着かなく視線をさ迷わせながら、私に注意を送ってくる。

「では……泊めてくれるか？」

ムクリと、起き上がって陸へと尋ねる。

「分かった！ 本気で、分かったから！ 泊めるよ、泊める！ 泊めればいいんだろ！？」

陸の肯定の返事に立ち上がって、私は両手の親指をビシリと立てる。

それを見た陸は半眼で疑わしそうに呟く。

「何か……俺……騙されてないか？」

「気のせいだ。体育たいいくの二つ目の《い》くらいどうでもいい事だ」

「それは確かにどうでもいいが……」

釈然とせずに首を捻る陸。

言質を取った私は強引に陸の手を取って、駅の改札口へと引張って行く。

「何かな……気になるんだが……とても気になるんだ……」

「気にするな。少年よ恋心を抱けだ！」

「……大志だつて」

そう訂正つつこみを放たれながらも、私たちは陸の家へと向かった。陸の手を後ろ手で引きながらデスノのライトばりの笑顔で私は笑う。計画通りだ。

時々、私は自分の才能が恐ろしくなるでござる。

そう、愛しきものを攻略するためのテクニク。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ演技》！

愛しいものを手中にするためには、悲しいが……優しい嘘をつかなくてはならないのだっ。

今のところ《陸・陥落大作戦》は完璧無敵でござる。スペインの無敵艦隊だ。

いずれラヴという名の海を、我が艦隊が征服しつくす日も近いだろう。

なっははははは！ 吾輩のラヴに不可能はないッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9105x/>

なんでやねん！

2011年11月1日03時10分発行